

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5 年計画の 5 年目)

1. 研究課題

(和文) 術数学—中国の科学と占術

(英文) Study on Shushu : Science and Divination in China

2. 研究代表者氏名

武田時昌

3. 研究期間

2010 年 04 月 - 2015 年 03 月 (5 年度目)

4. 研究目的

術数学は、自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である。東アジア世界の科学文化を構造的に把握し、学問的な本質や特色を明確にするには、近代科学の先駆的業績として離散的な発見、発明を時系列に並べて顕彰するだけではなく、当時の科学知識がいかなる役割を担っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術数学がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。そこで、術数学を総合的に研究するプロジェクトを立ち上げることにした。研究の手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科学や占術に関する論説が満載されていることが注目される。また、日本に残存した『五行大義』『医心方』や陰陽道資料にも、中世の術数書の佚文が多数引用されており、きわめて有益である。それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探る。

5. 本年度の研究実施状況

科学・占術が思想文化、宗教文化とどのように相互関連するかについて検討し、術数学の研究の場を明確にし、学問的輪郭や理論構造の特色を多角的に考察した。取り組んだ主要な研究テーマと考察内容は以下の 3 つの事項に大別できる。(1) 死生観、自然観や身体論の形成に関する道教文化の影響：神仙思想や道教の研究者を招聘して特別講演会を開催し、魂魄観、修養法(内丹)、仙薬(外丹)、呪法等について医薬書、術数書との関連性をめぐって討議した。(2) 先秦方術から中世術数学への変容過程：馬王堆出土帛書『刑徳』『式法』『陰陽五行乙篇』等を会読し、占術理論の数理的考察を行い、その方面の国内外の研究者を招いて特別講演会を開催した。(3) 術数学に理論基盤を提供した漢代象数易(とりわ

け京氏易)の中世、近世的展開:『卜筮元龜』を会読し、『火珠林』『断易天機』等の関連文献と比較しながら近世に流行した断易の数理構造を分析し、その理論基盤について遡及的考察を行った。また、彦根市博物館琴堂文庫所蔵占術書を調査し、目録データベースを作成した。

8. 共同研究会に関連した公表実績

<出版物>

(1) 『陰陽五行のサイエンス 思想編』(2011年2月、武田時昌編、人文科学研究所)

(2) 『術数学の射程—東アジア世界の「知」の伝統』(2013年3月、2012年6月に行ったソウル大学を中心とする科学史研究者と実施した国際シンポジウムの研究発表者による論文集。掲載論文16篇。会議録の原稿を増補、加筆したもの、または新たな論文に差し替えたものを集録する。日韓両国でそれぞれ自国語に翻訳したものを同時出版)

(3) 『小島宝素堂関連資料集』(東方学資料叢刊第20冊、多田伊織・武田時昌編、2012年3月)

(4) "Historia Scientiarum" Vol.24, No.2 (日本科学史学会欧文誌) 特集号「東アジア科学史の新展開」(武田時昌編、2015年3月)

<術数学国際研究集会>

(1) 2010年10月2日 術数学国際ワークショップ2010「東アジア伝統医学研究の新展開」(国外招聘者: NGUYEN THI Duong (阮氏楊) ベトナム社会科学院・漢喃研究所研究員)

(2) 2012年2月2-4日 日韓術数学ワークショップ2012「東アジア術数学研究の現状と課題」(国外招聘者: 韓国術数学学会の中心メンバー6名、趙仁哲(円光数碼大学校教授・朴權壽(忠北大学校教授・李容周(光州科学技術院准教授・全勇勳(ソウル大学校奎章閣韓国学研究院講師・李東哲(龍仁大学校教授・徐大源(忠北大学校講師)

(3) 2012年6月21-23日 第一回 Templeton 東アジアの科学と宗教” 国際ワークショップ「東アジア世界の「知」の伝統: 科学と思想、宗教のあいだ」(場所: ソウル大奎章閣(テンプルトン財団のプロジェクト支援によるソウル大科学史研究室(代表: 金永植教授)との共催イベント、術数学研究会メンバー10名を含む日韓中の学者18名による研究発表集会)

(4) 2013年2月12-14日 術数学国際ワークショップ2013「易占研究の本質と日本的展開」(北海道大学大学院文学研究科中国文化論講座(代表: 近藤浩之准教授)との共催イベント、国外招聘者: 吳偉明(香港中文大学教授)

(5) 2013年3月8-10日 東アジア数学史国際ワークショップ(第II期第2回)&科学史国際シンポジウム2013 (東アジア数学史国際集会実行委員会(委員長: 小林龍彦(前橋工科大学教授)との共催イベント、前2日の数学史国際ワークショップにおいて中国からの招聘研究者11名を含む14名の研究発表、最終日に科学史国際シンポジウム2013(人文研術数学研究会による主催)、紀志剛(上海交通大学教授・董煜宇(上海交通大学副教授)による特別講演など、合同シンポジウムの総合テーマ: 「東アジア世界の科学文化を考える」)

(6)2013年7月19日～21日 術数学国際ワークショップ 2013-7「術数学と宗教文化」(3日目の術数学国際シンポジウム 2013「科学史、思想史から見た東アジアの宗教文化」の国外招聘者：徐光台清華大学教授・姜生四川大学教授)

(7)2013年9月13-15日 日韓術数学シンポジウム「東アジアにおける術数学への多角的アプローチ」(場所:円光デジタル大学ソウル分館) (韓国の術数学学会との共催イベント、主催：円光デジタル大学東洋学科、共催：京都大学人文科学研究所術数学研究会、後援：韓国科学文明史研究所、韓国学中央研究院、術数学研究会メンバー7名を含む日韓研究者15名による研究発表集会)

(8)2014年11月9日 術数学国際ワークショップ 2014-11(場所：あべのハルカス 24階大阪芸大スカイキャンパス) (日本道教学会 2014年度年会の併催イベントとして術数学研究会主催、日本道教学会共催、国外招聘者：吉宏忠上海市道教教会会長、姚樹良上海市道教教会副会長、尹志華中国道教協会国際部副主任)

(9)2014年12月10日 術数学国際ワークショップ 2014-12「道教研究の新展開」(日本道教学会、大阪府立大学人文学会 2014学術研究会との共催イベント、国外招聘者：蔡林波中国華東師範大学副教授・姜生四川大学教授)・三浦國雄四川大学教授)

<国内各種学会との共催イベント>

(1)2011年12月4日 科学史学会創立70周年記念 京都シンポジウム 2011 (日本科学史学会京都支部との共催、総合テーマ「東西科学文化交流史研究の新展開」)

(2)2012年7月21日 科学史公開講演会 (日本科学史学会京都支部との共催イベント、国外招聘者：Gerhard Leinss ケンブリッジ大学研究員)

(3)2014年4月6日 胡平生先生特別講演会 (古算書研究会との共催、大阪産業大学梅田サテライトキャンパス) (4)2014年11月16-23日 中国古代文物調査ワークショップ (復旦大学出土文献与古文字研究中心との合同調査&討論会、招聘メンバー:劉釗教授・郭永秉副教授・張傳官助理研究員・謝明文助理研究員・廣瀬薫雄副研究員)

<東京での術数学ミーティング>

(一般公開の招待講演&研究発表集会、場所：大正大学巣鴨校舎)

(1)2011年9月4日 術数学東京ミーティング 2011 (特別講師: 宮川浩也 (北里大学東洋医学総合研究所 客員研究員「馬王堆出土医書『雜療方』の復元試案例」)

(2)2013年3月18日 術数学東京ミーティング 2013 (特別講師:小川陽一東北大学名誉教授、公開討論会のテーマ「術数学の学問的輪郭と形成過程」)

(3)2014年3月28日 術数学東京ミーティング 2014 (合同討論会のテーマ「術数学の問題圏」)

<一般公開講演会>

(1)2010年6月6日 藪内清博士追悼 東アジア科学史国際研究集会 2010

(2)2013年6月2日 藪内清博士追悼 東洋天文暦法研究国際研究集会 2013

(3)2013年11月2日 伝統医療文化シンポジウム 2013 (特別講演:山崎光夫 (作家)、公

開討論会:テーマ「伝統医薬の行方」)

(4)2014年6月1日 藪内清先生追悼 東アジア科学史国際研究集会 2014

<一般公開セミナー>

(1)2011年9月2,9,16,30日 京都アスニー・ゴールデン・エイジ・アカデミー (場所: 京都アスニー4階大会議室) (京都アスニーとの共催イベント。班長の武田が企画し、術数学研究会メンバー2名を含む講師4名による公開セミナー、総合テーマ「近世日本の科学と技術」)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	女性数	総計	外国人	大学院生	若手研究者	女性数
所内	1	5	2			2	60	6			22
学内(法人内)	2	13	5	7	3	9	145	86	92	32	90
国立大学	6	8	1	4	1	3	64	2	2	5	32
公立大学	3	8	1	3	2	3	88	9	19	14	20
私立大学	17	24	1	5	7	13	215	2	63	30	150
大学共同利用機関法人	2	2			2		22			22	
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関	6	6				1	51				16
外国機関	6	17	14		3		27	14		3	
その他	4		4			3	30				28
計	47	83	28	19	18	34	702	119	176	106	358

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	42(30)
国際学術誌に掲載された論文数	0

※ () 内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合

役割	
総論文数	0
国際学術誌に掲載された論文数	0

※（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載

高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由			
掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

